# 日本スポーツ社会学会会報

# Sport Sociology

第26号

目次


第9回学会大会特集 1
理事会報告 20
総会報告 21
編集員会からのお知らせ 22
国際学会通信 23
掲示板 26
追悼文 29
新入会員・住所所属変更 30



日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局　香川大学　2000年6月

# 第9回大会特集

大会テーマ　スポーツの20世紀　―戦争・スポーツ・身体―

## 特別講演

"Victory at all costs!: Taking Risks in 20th Century War and Sport"

「リスクという視点から見た２０世紀の戦争とスポーツ」

Keynote speaker : **Peter Donnelly**（北米スポーツ社会学会 NASSS 会長、トロント大学、Canada）
P・ドネリー（カナダ・トロント大学）

Guest speaker　: **Nicola Porro**　（国際スポーツ社会学会 ISSA 理事、カシノ大学、Italy）
コメント　N・ポーロ（イタリア・ローマ大）

司会　：松村　和則（筑波大学、体育科学系）

Ｐ・ドネリー氏の関心は、戦争とスポーツを対比することによって次のような問題へ迫ることにある。まず、即時的に身体的リスクを冒すのがなぜ若い（大体１５歳から２５歳）男性に多いのか。そして、共にリスクを冒すことではあるが、個人の心理学的性向が現れる現れ方が違うのはどうしてか（スカイダイビングをするのか、車泥棒をするのか）。

これらの疑問に答えるためにはリスクを冒すことの社会的文脈を考えることが大切であり、ある特定の文脈におけるリスク性をめぐって社会的に構成された意味を考える必要があるというのである。

そして、リスクが社会的に構成されるということが理解されるには、(1)性格、(2)アイデンティティ、(3)友人関係の３つの要素が重要であるという。(1)　勇気、不屈の精神、誠実さ、冷静さの４つが性格のテーマであり、これらはスポーツと戦争に付加されてきた価値である。つまり、現代ではスポーツが戦争に代わってこ　れらの価値の世界へと誘う。
(2)　アイデンティティは、こうしたリスクを冒すその間に確立される。
(3)　高ストレス状況の中では、友人関係がリスクを冒す要因となる。

社会的文脈の違いによって結果は異なる。年齢、ジェンダー、エスニシティ、階級などの帰結としての様々な可能性が考えられるが、現代社会でとりわけ同年齢集団の関心が再度重要視される必要があると結論される。

スポーツと戦争での勝利は、社会的、心理的な事情の極端に複雑なセットだといえる。そして、どんなに費用をかけても勝利を生み出そうとすることは、まさしくリスクを冒すことをその中に含んでいる。

以上がＰ・ドネリー氏の発表の要約であるが、これに対してＮ・ポーロ氏は「戦争とスポーツの集合的表象の間には大きな類似性があるが歴史的にも関係が深い。その点を重視するには、社会・歴史的アプローチを採用すべき」こと。さらに、Ｐ・ドネリー氏の発表の「下味」としてＡ・ギデンスの仕事があるが、彼のいう「ラディカル・モダニティ」という概念をもっと深める必要があったのではないかと問題提起した。つまり、信頼とリスクとの関係、専門家のシステムの発展が現代社会においてどのような意味を持つかを考える必要があるというものである。

最後に、現代のリスク文化をめぐるイタリア社会学の成果として、次の４つの社会集団を類型化している。

①運命志向（リスクの意味を受動的要因として受け入れている人：宿命論的な合理性、一般的にアウトサイダーという社会的な位置づけ）②序列志向（極端なリスク恐怖症、官僚制的な合理性、公の制度に依存しがちな人など、③個人志向（リスクを背負う人、独立した合理性、多かれ少なかれ市場や競争的活動にしばられている)、④平等志向（より強くリスクを冒すことができる、批判的で価値志向的な合理性、マイノリティの文化、セクト的運動、急進的環境主義者など)。

この四類型は、現代スポーツとスポーツの実践者、技術者、ビジネス・マネジャーなどの複雑なからまりを研究するために有効であると述べた。

さて、Ｐ・ドネリー氏の講演に少し物足りなさを感じたフロアーの人が多かったかもしれません。しかし、それをＮ・ポーロ氏のコメントが補ってくれていたと思います。少しピーターに肩入れしてお話しすると、学会大会の実行委員会がＰ・ドネリー氏をキィノートに招いた理由は、彼が北米スポーツ社会学会の会長であり、それを９月になって決定したという時間的な問題が背後にあったように思います。他の人ではとてもその時期では間に合わないという判断がありました。それでも、我々の「身体・スポーツ・戦争」というキィワードのシンポジュームに参画しようという意志は十分に見て取れました。我々のテーマの北米的解釈であったように思います。

「戦争」というキィワードに拘ったのは研究委員長の亀山佳明氏でした。確かに、現代の若者に戦後民主主義世代の戦争観を理解してもらうことは並大抵のことではありません。というより、無反省な戦争観を助長する「若者風景」がここかしこに広がっていることに強いリスク感覚が湧いてきます。

「抽象的システム」への懐疑とリスクのグローバル化（戦争、原発事故、環境問題等）への認識が広がる一方で、人々は「基本的信頼」（Ａ・ギデンス）を模索して「実在論的安心感」にすがろうとするのでしょう。家族からも見放され（バスジャックの少年)、学校からはいわずもがなで、我が身だけが頼りであると考えれば、北野武が描いた『キッズリターン』は「スポーツ振興」の裏側の事実として心に留めておく必要があると思います。映画ではその「からだ」にも結果的には裏切られるのですが・・・。

私達の身体や環境に対して行使する「テクノロジー的権力」が増大する中で、核エネルギーの知識を抹消することもできずにそのジレンマの中で自暴自棄になるのではなく、行政の大きな変化を待つのみでなく、自らが傷つくことを覚悟で日常的な実践に飛び込むことも今は求められているのではないでしょうか。（Ａ・メルッチは非政治的な実践を重視していますが、その「公共空間」の現実的なあり方を定めるのは並大抵な努力ではないと思います。)

「体ほぐし運動」が単にからだを動かす楽しさを求め、身のこなしが巧みとなって、ストレスの解消、仲間作りに寄与することに留まるとするなら、「体育の世界」に上述したジレンマへの積極的な実践を期待できないでしょう。また、両極分解するスポーツの世界にもペシミスティックな風情を感じます。しかし、身体を動かすことのメタ政治性の次元と生活変革との繋がりに期待をしつつ、実践を続けていくことに望みを捨てていません。

【院生及び新入会員の方々へのメッセージ】

学会の立ち上げ準備からお手伝いをしてきた関係で、この１０年という歩みは小さいものではないと感じています。社会学と体育学（体育社会学）の橋渡しをするのが筆者の役割だとずっと考えてきたものですから、その感が強いのだと思います。



『スポーツ社会学研究』の創刊号を手にとって戴けたら、その「入れ込みよう」の一端は伝わってくるのではないでしょうか。関西を代表する井上俊先生と東北を代表する田原音和先生が同じセッションの土俵に登り、体育の今村浩明先生がその中へ割り込んでいくというセッティングは「スポーツ社会学会」以外では実現しなかったと思います。

「身体の問題は、自然と文化、主観と客観、理性と感情・・・二元論を超える可能性をもったテーマとして、・・・ジェネラル・ソシオロジーに貢献しうる大きな可能性の一つがここにあります（『スポーツ社会学研究』第１巻)」と井上会長が述べたのに対して、スポーツを「場」として捉えて、その文化空間と社会的空間の連関を考えるＰ・ブルデューの理論に「スポーツ社会学」構築への道筋があることを示唆したのが故田原音和先生でした。

学会を業績作りの場としたくありません。若い院生諸氏（本当は自分自身）に申し上げたい。この学会が創設された頃の熱気を忘れないようにしたいのです。この１０年を引っ張ってくださった井上会長を中心とした関西を中心とした社会学出身の会員の方々に感謝したいと思います。本年と来年の大会のセッションは、その意味でこの１０年間の決算という意味も含んでいます。

１０周年の記念大会を筑波大学で開催させていただくことになり、佐伯年詩雄理事（大会会長）を中心に準備しております。来年の３月には必ず筑波へ足をお運びください。最後は学会の宣伝になってしまいました。

## 山本教人　（九州大学）

日本スポーツ社会学会第９回大会は、大会テーマに「スポーツの 20 世紀－戦争・スポーツ・身体－」を掲げ、上智大学を会場として開催された。大会の口火を切る特別 講演では、わが国のスポーツ社会学関係者には既にお馴染みのトロント大学のピーター・ドネリー氏が、「すべてを賭けた勝利！：20 世紀の戦争とスポーツにおけるリスクの請け負い」と題するスピーチで、まずこの大会テーマに迫った。

ドネリー氏は、スポーツは戦争ではないし、わが国のマスメディアでしばしば使われるような、「代理戦争」という言い方も正しいものではないとしながらも、両者は「リスクの請け負い」という点では類似したものとなるという。（私は知らなかったが）氏はかつて自らのロッククライマーとしての経験を理解しようと、こうしたリスクの問題に心理学的動機付けの調査研究でアプローチしたことがあるのだという。しかしながら、リスクに関する心理学的なアプローチは、次の２点を明らかにし得ないということで、結局満足のいくものではなかった。まず第１に、直接的な身体的リスクの請け負いが、どうして 15～25 歳くらいの若い男性において最も顕著に現れるのかということ、そして第２に、スカイダイビングをするのと車を盗むのとではリスクの請け負い方に違いがあるが、そうした個人の心理的傾向の現れの違いを何によって説明できるのか、ということである。

氏は、このような疑問に答えるためには、リスクの請け負いが生じる社会的文脈の考察と、特殊な社会的文脈で、リスクの請け負いをめぐって社会的に構築される意味の考察が不可欠であるとする。そして、こうした「リスクの社会学的考察」から、先に示した２つの問題に対して有効となる３つの鍵概念－「性格」、「アイデンティティ」、「僚友関係」－が導かれ、次のように結論される。まず第１の疑問、つまりなぜ若い男性において直接的な身体的リスクの請け負いが最も顕著に認められるのかということについては、性格とアイデンティティがその年代では最も重要であるからであり、同輩集団がこの年代の人々に最も影響力を有しているからである。第２の疑問、すなわち個人の心理的傾向の現れにな

ぜ違いが存在するのかということについては、個人が身を置く社会的文脈－それは個人的属性の反映であると同時に、彼の同輩集団の関心の反映でもあるのだが－が違うからである。

続いて登壇したイタリア、カシノ大学のニコラ・ポーロ氏は、戦争とスポーツの両方におけるリスクの効用を説明する概念として、ドネリー氏が提示した３要因を支持する。その上で氏は、リスクに対する志向性の違いから４類型化された社会集団－「運命志向」、「序列志向」、「個人志向」、「平等志向」－を提示し、それらが、現代スポーツをリスクという観点から研究する際に有効な分類となるのではないかと論じた。

討論のために残された時間は十分なものではなかったが、女性がリスキーなスポーツにますます関わるようになっていることをどのように解釈したらよいのか、などをめぐって若干の意見交換があった。

最後に、私自身の感じたことについて若干述べさせていただくなら、なぜ若い男性が特定のリスキーな行動を好むのかということについて寄せられたドネリー氏の回答には、「それはそうだろうけど・・・」、と失礼ながら思ってしまった。またドネリー氏のスピーチに対してコメントを寄せてくださったポーロ氏に対しては、提示された社会集団の４類型は、現代スポーツをリスクという観点から研究する際の有効な枠組みになるのかもしれないけれど、身体的なリスクに限定して論を展開していたドネリー氏とは違う次元でリスクを論じることになってしまったのではないかと感じた。

# シンポジウム『スポーツの20世紀――戦争・スポーツ・身体――』

司会者：平野秀秋　（法政大学、体育科学系）

1）多木浩二氏　「ナショナリズムとスポーツ」
2）坂上康博氏　「戦時下におけるメディア化された身体とスポーツ」
3）西山哲郎氏　「民族的対立を超えるものとしてのスポーツ」

多木氏は、特に「ネーションと国家」という二つの異なった要因の対立という観点にしぼり込んで報告され、スポーツをこの対立の狭間に位置すると捉えることの重要性を示唆された。「ネーション」とは存在するようで存在しないものである。近代に「国家」がねつ造したフィクションである。それは、日本または日本人というネーションが「国家」を抜きにして成立するかを考えれば分かる。日本国家があるから、私たちは極東軍事情勢、アジア開発経済、為替相場や外貨準備等々に巻き込まれて生きている。ではこれをなくすことが出来るかと考えれば、その不可能さではなくとも戦慄すべき困難さが分かる。金融市場という抽象的フィクションが着々と私たちの財布から金を取り上げるのと同じことだ。多木氏の問題提起は、この「ネーション」の名において巨額の資金が動員されるオリンピックなどを成立たせているスポーツという人間行動を研究対象とする私たちへの問いかけである。同氏は、このことを思う自分とスポーツを享受している自分とが網膜剥離を起こしているというフランスの文学者の証言も交えながら、諄々とこの不条理の諸相を語られた。坂上氏の報告は、主として太平洋戦争期の日本の新聞、雑誌、ラジオなどがスポーツ関連情報をいかに報道したかという、メディア上の出来事に関するものであった。やがてメディア史となり、ひいては歴史把握につながる資料発掘の試みである。このような作業が同氏だけでなく多くの人々によってなされることは有意義である。この作業が熟して歴史として物語られるときに、この日だけでは充分見えなかったメディアの舞台裏、それら報道が人々に何をもたらし何をもたらさなかったか、などの全体像が浮かび上がることを期待しよう。西山氏は B4 用紙 4.5 枚におよぶ報告資料を配付して高い意欲を示された。その報告は要約すると次のようになる。

1）スポーツがグローバリゼーションを可能にしている、2）競争スポーツでない遊戯的スポーツ、X スポーツなど既存概念の枠外にあるスポーツが「新しい社会運動」として民族対立などを超える「ユニバーサル・スポーツ」の可能性を持つという提言。この論点は、冒頭の多木氏の深刻な指摘と並置すれば会場の深刻な討論対象になったと思われる。これに関連し、司会の不手際から会場における討論が時間的に不可能になった。報告時間も十分といえない不便をおかけした。これはひとえに司会者の責任としてお詫びしたい。

# テーマセッション　『身体の近代』

清水　諭（筑波大学、体育科学系）

コメンテイター：亀山佳明（龍谷大学）
No.20　挟本佳代「身体と文化の理論の源流」
No.21　菊幸一「文明化の過程から見た体育と暴力―体罰と近代―」
No.22　倉島哲「武術教室における言説と身体」
No.23　山本敦久「キックボクサーの身体―従順な身体とプリミティヴな身体」

１．４人の発表について

スポーツ社会学会における初めての試みとしてのセッションは、1991 年に学会が設立されて以来これまで通底した問題としてある身体を取り上げた。それは、スポーツをはじめとするパフォーマンスの実践や観戦、あるいは近代国民国家の再生産装置としての学校文化を考える上で避けて通れない問題を内包している。これまで、N.エリアス－E.ダニングの暴力にまつわる「文明化の過程」理論から、M.モース、C.レヴィ＝ストロース、P.ブルデュー、そして M.フーコーあるいは、M.メルロ＝ポンティなどを理論的基盤として論議されてきた。しかし、このセッションでは、それを参考にしながらも「身体を基盤とする動き」の現場から何らかの新たな知とその理論の萌芽を見つけられればと考えた。

第１の発表、挟本佳代（「身体と文化の源流」、日本学術振興会）氏は、これまで身体を論じることから人間がいかなる存在であるのかを問おうとしてきたが、その時「西欧近代思想の構成原理である心身二元論を本質的に批判し、理性主義に陥ることなくその呪縛から訣別しようとした過去の理論の再検討」をすべきであるとする。その視点から挟本氏は、身体文化の理論的源流を H.スペンサーと B.マリノフスキーに求めている。彼女は、H.スペンサーが「人間を含む生物全体を『自然』に包摂された存在であると捉え、かつ在るべき人間社会として『自然』と『社会』が完全に一致する未開社会を想定して」いたことに注目した。したがって、H.スペンサーの「文化」は、「『自然』すなわち土地に根ざした共同体の中でこそ受け継がれるもの」であることを強調する。また、B.マリノフスキーからは、「クラ」交易の参与観察から
「『実生活の不可量部分』と呼んだものから『文化』を理論化しようとした」点にその特徴を見ている。

挟本氏の発表は、身体の理論とは一体何なのか、その視角はどこに置かれるべきなのか

を考えるものとして重要な示唆を含んでいる。

第２、第３の発表である倉島哲（「武術教室における言説と身体」、京都大学大学院）と山本敦久（「キックボクサーの身体」、筑波大学大学院）は、できるだけ実践の現場から考えていこうとするものである。

倉島氏は、武術における実践者の「その能力のある人には『わかる』がそうでない人には『わからない』もの」としての技能の中で、特に「線」について考える。そして、こうした言葉にならないものがあるにもかかわらず、武術教室などについての理解は、「気功」や「太極拳」といった範疇で行われていることを指摘し、こうした言説の象徴性によってのみ社会的空間の構築とその分析を行う P.ブルデューの理論を批判するのである。倉島氏は、P.ブルデューが実践者の理論を研究者が理論化していこうとするのだが、結局、言説の象徴性から共同体を物証化しているにすぎないのではないかと言うのだ。

山本氏は、キックボクサーのボディワーク（試合前数週間から試合直前まで）を綿密に追い、水分、食事、セックスといった欲望を抑制した生活と、試合当日の計量、バンデージ巻き、マッサージ、ストレッチ、ミット打ち、そして「リングに上がる」というプロセスを観察した。これは、禁欲した規律・訓練のプロセスに耐え、突如として闘争する身体が表れてくる、すなわち「興奮した闘争的な身体の層と冷静で禁欲的な身体の層が、場面場面で波のように現れては消え、また姿を現す」キックボクサーの身体性を垣間見たのである。そして、こうした禁欲的でありながら、快楽を味わうキックボクサーが意識的かつ無意識的に「ハングリー」を求める、あるいは求め続けるのは、一体なぜなのかを問おうとする。

山本氏は、キックボクサーたちが意味あるものとして、あるいは意味のないものとしてこれをやり続ける社会的背景を問うことと同時に、その身体の重層性を捉えようとするのである。

第４の発表、菊幸一（「文明化の過程から見た体育と権力」、奈良女子大学）氏は、N.エリアスの文明化の理論における暴力の抑制とスポーツの誕生について分かりやすく説明した後、近代国民国家の再生産装置としての学校と、そこにおける体育（教師）の役割を宮廷社会における暴力独占の形態をもとにしながら分析しようとする。

結果的に体育が全体社会の中で「感情抑制の中での脱抑制」としての「飛び地」としてあるが、そこに新たな序列化闘争が持ち込まれた時、暴力を独占する体育教師と生徒の間で、「体育教師の対応次第では、『負』の暴力的行為が互いに発動される危険性を持つ」とする。そして、こうした体育と暴力との関係の歴史的背景を見つめることから、体育教師と体育のあり様を考えようとする。

## ２．亀山佳明氏のコメントと議論

これらの４人に対して、コメンテイターの亀山佳明（龍谷大学）氏は、まず 1970 年代以後、近代（規律・訓練的な苦しさ）を超えるもの、あるいはそこからはみ出すものとしての身体が注目され、集合表象を「モノ」として見る E.デュルケーム以後、M.モースや P.ブルデューによって、特にその身体技法に注目した対象として語られるようになったことを述べた。そして、今日、カルチュラル・スタディーズの中で、身体を通して文化接触や分節化の問題を問うといった権力論が展開されていると言う。

これに対して、対象としての身体を捉える視点、すなわち方法論としてデカルト以後の二元論を超えるものとしての現象学が、M.メルロ＝ポンティ、シュッツ、あるいは存在論としてあり、もう一つ、言語論を展開する構造主義の流れの中で M.フーコーの視点があ



ると述べた。

そして、亀山氏は身体が構造的、文化的な現象や意識、あるいは言説として捉えられないものである故に、身体を構造（言語）とその外部性との境界に設定することが必要であるとする。

亀山氏は、こうした彼の身体に対するパースペクティヴをもとに発表者に質問をしていった。挾本氏には、H.スペンサーの理論のより詳しい説明を求めながら、「自然」と「文化」を分けるとするなら、その「自然」とは何か、そして亀山氏の提示した身体、構造、そして外部性の関係こそ近代によって作られたものであり、H.スペンサーや B.マリノフスキーが考えたのは、構造（社会システム）と外部性（自然）とが一致したものであり、その中で身体＝文化としての領域があるのではないかとした。

続いて亀山氏は、倉島氏の発表について、外部性を言説化する際に「線」といった「メタファー言語」を規定するのであって、こうしたことから構造で捉えられないものを捉えようとしているのではないかと言う。また、山本氏に対しては、格闘家たちは日常の身体の分節化されたルーティンをはがすことで「野性」になる、すなわち「闘う」のであって、外部性を体現する他者となったものにとって、なぜ闘うのかの意味は分からなくなるのだとする。こうしたことから格闘を通したアイデンティティとは何かの議論が可能になると言う。

最後に亀山氏は、菊氏の発表に対して、外部性を持つ者としての子どもが、構造の内部に押し込まれる際には、ミクロ権力内で教師の暴力によるコントロールを体現していくことは、M.フーコーなどでも明らかであり、体育教師に限らず、学校というシステムと教師全体の問題になることを述べ、なぜ体育教師なのか、そして体育教師と生徒との関係を「パラドックス」というのはなぜかと問うた。

これに対して、菊氏は、構造の内部にいる者にとって「パラドックス」と見ることができるのだとした上で、体育教師のこうした存在性をどう考えるのかに今後も注目したいと述べた。

こうした議論をふまえながら、フロアーの平野秀秋（法政大学）氏は、構造とその外部の両方にまたがる身体という位置づけこそ、権力（あるいは暴力など）の存在の有無、あるいは例えば松田恵示（岡山大学）氏の発表のように、電子メディアの中で人間を他性として存在させるか、させないかといった思考のジレンマそのものを表しているのではないかと述べた。そして、対象としての身体に対する視点を作っていけば、また新たな対象が生まれ、そこでまた新たな視点が作られるという人間の持つ矛盾が身体の議論を通して明らかになってくるのだろうと言う。

私たちは、こうして身体という対象とそれへの視点から、暴力や自然、また構造や秩序、あるいはアイデンティティについて思考する糸口をもたらされるのだが、電子ゲームなどにも見られるように、他者と自己との行き来の連続の中で、突如外部性に出合う、すなわち相対的な他者との出合いをどのように考えるかに迫られているのであり、それは人間にとっての「死」の問題にもつながることを理解できるだろう。

## ３．まとめ

常時約 70 名が見守る中で行われたこのセッション議論は、対象としての身体とその視角について、亀山氏の提示した構造と外部性との境界に位置づけられる身体という図式に対する議論をふまえながら展開した。時間があれば、個々の発表のすぐ後に、発表自体に関する質疑応答をフロアーから受けた方が、個々の問題を整理する上でよかったのかも知

れない。
しかしながら、人間の存在と思考にとって身体とは何なのか、今後どのように捉えるべきなのかについて深い議論が交わされたことに違いない。当日、その場に居合わせたすべての方にお礼申し上げる。今後さらに、このセッションをふまえて、新たな視点の提示と対象化がなされることを期待したい。

# 一般発表A　座長：中島信博（東北大学）

## No.1『スポーツと国際協力－開発手段としてのスポーツに期待される役割－』

岡田千あき（広島大学大学院）

発展途上国に対する開発援助の新しい方法として、近年はスポーツが注目されるようになってきている。こうした傾向について、その背景や意義、あるいは問題点を考察しようとしたのが本報告であった。背景としてはＯＤＡ予算の削減、既成の援助システムじたいの問題などが指摘された。ついで、スポーツに対する期待が、「人間開発、地域開発、世界開発」という概念によりつつ論じられ、スポーツは人間開発に関連して、健康や教育において機能を果たしうるとされる。最後に、近年の傾向として、ＩＯＣとの共同実施が激増しており、「平和の推進手段」としてスポーツが注目されているという。
フロアからは、スポーツが盛んになれば、伝統的な身体文化が駆逐されて、「他文化の強制」という問題が生じないか。ＩＯＣの潤沢な資金の背景には、テレビの放映権料による収入があるが、これが将来的にどうなるのか、といった質問が提出された。いずれにしても、今回の報告は研究のスタートとして、国際協力に関する理念の解説を主とするものであって、より具体的な実証データによる分析や、事例研究による深化は今後の課題であると思われる。

## No.2『ワールドカップ・フランス大会前後における国際化と国家意識の変容-学生調査より-』

森津千尋（同志社大学大学院）

この報告は、フランス・ワールドカップをテレビで観た学生たちについて、大会の前後で意識調査を実施して、その間の変化をみようとした研究であった。結論としては、外国のチームやワールドカップへの認知に変化がみられるものの、日韓共催や外国選手受け入れなどに関しては態度の変化がみられなかったという。フロアからは、メディアの影響ないし、メディアによる誘導という問題が指摘された。
調査じたいが、ハプニングなどのために当初の計画通りに進まず、やむなく学生を対象としたこと。あるいは、女子を除いて男子のみで比較するように、要旨提出の後に変更したことなど、軸が定まっていないという印象を与えていた。2002 年にむけて、より効果的な調査計画の立案とその実施が期待されるところである。

## No.3　『カレッジ・スポーツと大学組織との葛藤－－誕生からＮＣＡＡの発足まで』

白石義郎（久留米大学）

アメリカのカレッジ・スポーツについて、「アカデミック」と「スポーツ」という２つの価値の葛藤という視角から検討を試みている。まずは「社会史」的な観点から、「出場資格問題」が論じられ、曖昧な大学制度、教員団とコーチの闘争、といった側面が紹介された。次いで、ＮＣＡＡの発足について、アカデミックな立場からのカレッジ・スポーツ批判と、エリート校間の主導権争いという２つの力学に着目し、ＮＣＡＡ発足の背景を考察している。結論としては、アカデミックな教員団によるコントロールの弱さ、利益集団の派生、一般学生の「非アカデミックな学生文化」による支持という３つの側面が強調された。
フロアからは、訳語の確認や、ＮＣＡＡの性格をめぐる論議がまず提起された。特に、ＮＣＡＡによるテレビ放映権の独占問題や、そこでのフットボールの位置、あるいは組織のコントロール主体をめぐる質疑は有益であった。最後に、今回の報告で扱われているのが「インター・カレッジ」のみで、「イントラ・カレッジ」も重要ではないかという指摘もなされた。いずれにせよ、カレッジ・スポーツの歴史的変化をダイナミックに捉える試みは、さらなる深化を期待したい。

# 一般発表A　座長：甲斐健人（愛知教育大学）

## No.4　『スポーツと笛に関する社会学的研究』

浦田八千代　（岡山大学大学院）

浦田氏はスポーツ場面で使用される笛に注目して社会学的考察を試みた。報告時間の多くはシュッツの音楽論、クラーゲスのリズム論の検討に割かれたが、報告の要点は笛はスポーツ場面において時空間を分断する（相互同調関係を断ち切る）という「社会的通念」に対して、むしろ笛は相互同調関係を作り出しているのではないかという主張にあったと思われる。
報告後、本報告をリズムと身体性とがどのように関わっているのかという問いとして把握しながら、笛がコミュニケーションと結びつくようなリズムを作り出すのかという点に関して参加者間で意見が交わされた。議論は笛によって相互同調関係が生じているとするならば、それはメタレベルでのことなのではないかという意見に収束した。なぜ笛に注目して研究をするのか（問題のたて方によって先行研究は自ずと定まってくるのではないだろうか）、シュッツの音楽論が笛の考察をするために適切であったのか、などの問いが残された。審判が用いる笛だけではなく観客席の応援の笛なども含めるという報告者の発言に基づきさらに考察を進めるならば、メタレベルでの相互同調関係が生じるという理解に到達するのであろうか。今後の展開を期待したい。

## No.5　『近代スポーツのオルタナティブ　―Adapted Physical Activity の思想から ―』

藤田紀昭　（日本福祉大学）

藤田氏は障害を持つ各個人に合わせてルールや方法を変容させ身体活動を行う Adapted Physical Activity（以下、APA）という考え方を通して近代スポーツに対する提言を試みた。報告では APA の理念の紹介、近代スポーツがもつ問題性の確認、近代スポーツ的な障害者スポーツが内包している矛盾の指摘、近代スポーツの問題性を克服するための自己実現や自己達成という価値観の提示などがなされた。報告のポイントは過剰なまでの他者との競争によって歪んでしまった近代スポーツ（障害者スポーツも含む）の限界を乗り越えるべく、競争の対象を自己の内部に求めようとする点におかれていたと思われる。
フロアからの質問は概ね以下の３点にまとめられよう。それぞれの話題について報告者との意見交換がなされた。１）APA 思想に基づくスポーツにおいても、なんらかの評価基

準は設定されているのではないか。いったいどの様にしてその基準を設定し、さらに、それを受け入れる社会をつくっていくのか。2）APA 思想に基づくスポーツを構想した場合に、他者との対峙を減少させる結果に繋がる恐れはないのか。3）障害が顕在化しやすいスポーツという領域であえてノーマライゼーションを主張することに、どの様な意味があると考えているのか。

本報告に関心をお持ちの方は『スポーツ文化を学ぶ人のために』所収の藤田氏の論考を参照いただきたい。

# 一般発表B　座長：市毛哲夫（東北大学）

## №6　『スポーツ固有法の変容に関する一考察　―ラベリング理論を基に―』

伊藤　克広　（神戸大学大学院研究生）

伊藤氏の発表は、ラベリング理論の視点からみたスポーツ固有法の変容をモデル化することと、そのモデルに基づいてスポーツ固有法の変容の事例を検証するという 2 点を目的とするものであった。社会におけるある行為は「法」に基づいて判断され、それが法に反して「逸脱」であるというラベルが貼られると制裁を受け法の変容は起こらず、「逸脱ではない」というラベルが貼られるとその行為は社会に取り込まれ法の変容を生起する、というモデルが描かれた。このモデルは、スポーツ固有法（スポーツ・ルール、スポーツ団体協約、スポーツ理念）にも適用でき同様の「判断」と「ラベリング」によってスポーツ固有法の変容、不変容を引き起こすとしている。また、その事例として柔道界におけるカラー柔道着導入問題を取り上げ、このモデルに当てはめカラー柔道着が逸脱ではないとされ、スポーツ固有法の変容を招来したと結論づけた。

スポーツ固有法の問題はスポーツ文化の基底的研究領域であり、そこにラベリング理論を用いたモデルを提示するという意欲的研究であるといえる。今回の発表では取り上げられなかったが、判断の主体は誰であったのか、また「逸脱ではない」とするようになった意志形成過程やそこに作用したスポーツ界内外の諸力などの解明が待たれる。

## №7　『日本におけるスポーツ論争　―“日本的スポーツ論”批判序説―』

小野瀬剛志　（東北大学大学院教育学研究科）

小野瀬氏の研究は、武士道精神に支えられているといわれる、いわゆる日本的スポーツ観に対する疑念に端を発している。そこで個々のスポーツ種目が導入された明治期ではなく、“スポーツ”という言葉が一般的に使用されだした大正後期から昭和初期に着目し、スポーツをどのようなものとして捉えるかに関する、論争や言説を渉猟している。そこから、教育主義的スポーツ観と娯楽主義的スポーツ観が導き出され、対立構造が形成されたといている。教育主義はスポーツの本質を“表面的な”娯楽的価値の背後に隠れた教育的価値に求め、娯楽主義はスポーツの境界を体育との間に引くことで、スポーツの本質を娯楽的価値にあるとし、このことはスポーツ論争がスポーツが娯楽であることを暗に前提としてなされたことを示すものであるとした。さらに、両者の対立はスポーツの社会的定義をめぐる無益な争いではなく、両者ともスポーツを擁護し、発展させていくための社会的闘争であったとしている。

多くの史資料を用い、かなり読み込まれているのを推察されるが、歴史の断片を切り取り繋ぎ合わせているとの感は拭えない。今後はより体系的な論争史の提示が求められるよう。そのためには、当時の時代状況や時代背景のより正確な認識が必要であると思われる。



## №8　『遊び場の社会学』

小坂美保　（岡山大学大学院）

小坂氏は子どもの遊び場として重要な役割を担っている「公園」と学校の「運動場」に設置されている遊具（固定施設・運動施設）の類似性に着目し、各々の歴史的関係性を明らかにしている。すなわち、明治初頭に公園が整備されはじめた頃、そこには遊具の設置はみられなかったのに対し、文部省は学制発布の頃から遊戯場や遊具の設置について指導を行っていたとしている。さらに「体操科」の学習内容の変化が遊戯場から体操場、そして運動場へと名称を変化させ、のみならず面積の拡大と設置遊具の変化を起こしたことをあとづけている。そして、日比谷公園などの近代的公園に学校と同様の遊具が設置されたのは、学校をモデルとしたとしている。さらに、学校の運動場を媒介として公園の学校化が行われたとの結論を得た。

発表課題と発表内容にいささかの齟齬があるように思われる。また、遊具や運動などの用語の整理も必要であろう。しかし、普段よく目にする児童公園や学校の校庭にある遊具の類似性に着目し、その歴史的関係性を解明しようといた意図は、ある程度達成されていると思われる。

# 一般発表B　座長：橋本純一（信州大学）

## №9　『超社会化論と体育教師論』

野崎武司　（香川大学）

野崎氏の問題意識は、近年、「体育教師」をラディカルに問い直す試みがなされているが、近代やナショナリズムといった大きな枠組みの中で展開するそうした議論が、今ひとつ体育教師のリアリティに迫っていないという意識にある。映画「学校Ⅱ」における高志の《学校での学び》は作田啓一のいう社会化に相当し、《気球の体験》は、超社会化、つまり「能産的自然＝生命の構成関係を触発・促進することで新たなる自己へと超出すること」に値すると捉える。さらにメルロ・ポンティの超社会化に相当する体験についての記述から、主体を超社会化に導くのは、「身体に起こること」「生きている言語：前＝言語」「沈黙の声」であり、「分節が行われる以前の分節そのものである」、とし、大沢真幸の諸論に至る。大沢の社会理論における社会化、、近代的主体、超越性とその変容などの議論から超社会化の機制を解こうと試みた。そこでは高志の経験は新たな身体と自然との間身体的連鎖として捉えられ、さらにそれと同等のものとして《暴力》が超社会化の産物として導き出される。またそれは、スポーツの極限における歓喜と酷似したもので、体育（教師）の功罪両者の意味での役割について今後慎重に問い返して行く必要があるとした。会場からは大沢の超越性に関しての概念把握に問題があるという指摘がなされたが、体育、あるいは体育教師の機能・役割について根元的な局面での再考を促す発表といえる。

## №10『テレビゲームの他性と身体～テレビゲームはどこまでスポーツと呼びうるのか～』

松田恵示氏（岡山大学）

松田氏は、現代社会を特徴づけている文化としてのテレビゲームとスポーツとの関係性について、その社会学的な含意を、特に、遊戯性と身体性という視点から考察した。まず

テレビゲームについてこれまで述べられてきた悪影響論と擁護論をレビューし、その虚構と現実という問題の認識枠組を浮かび上がらせるが、シュッツや西村清和の議論からそのフレイムの妥当性に懐疑の念が示される。そしてテレビゲームの「固有の他者体験」とは、他者の他者性＝他性を含んだ「自身の身体の可逆性に戯れる体験と捉える。そしてそれはメルロ・ポンティが遺稿「見えるものと見えないもの」で、他性の介入を論じようとして「肉」と名づけた、身体の「差異化されたものの同一性」という存在性格への、積極的なアクセスといった側面をもち、それゆえにテレビゲームは「できる/できない」という、他性と共在する身体を志向する、という独特の仕掛けを用意することで、遊びという固有の存在様態、あるいは固有の他者体験を成立させる世界、とみることができるとする。また、最近のバーチャルリアリティとしての体感スポーツゲームはまさに「身体的な遊び」であり、メディア自身とスポーツするといえるものである。そこでの身体はフーコーの強調した物語や意味によってコントロールされるべきものとして構築されてきた身体というより、パフォーマンス重視で「個人＝主体」の解体された身体、「からっぽの身体」であるので新しい倫理の問題等多くの課題が生じている。これからのスポーツの社会理論には、メディア的空間、物理的空間という二重性のなかで多重化・拡張する身体の存在性格を問い、多重化を包み込んだメディアそのものを切り口とするような新しい身体概念が用意されるべきであるとした。フロアからもこのような研究の必要性と可能性についての熱い議論があったが、まさに現代社会理解の核心に迫るための契機となる報告といえるのではないかと感じた。

# 一般発表C　座長：三本松正敏（福岡教育大学）

## No.11　『パチンコとパチスロの社会学』

藤澤貴幸（岡山大学大学院）

藤澤氏は、氏自らがパチスロファンであることから、パチスロが人を魅了する源泉に興味・関心を抱き、さらにスポーツとの共通点があるということを経験的に了解していることから本発表に至っている。そして、本発表の目的は「行い手から見たパチンコとパチスロの違いを遊びという観点から社会学的に検討すること」としている。

氏はパチンコとパチスロの違いを解明するために、お金という供犠対象の破壊によって得られる「至高性」からではなく、つまり至高性の高いギャンブルとして捉えるのではなく、「偶然で遊ぶ」遊びとして捉えることから始める。そして、カイヨワとアンリオを批判的に検討し、パチンコとパチスロとその遊び手の間に現れる「偶然で遊ぶ」遊びの違いを明らかにするため、歴史と動作に着目する。歴史的には、「パチンコの発展はその『射倖性』も高まりと、それに伴うよりどきどきできるような演出を行う『娯楽性』の相互作用による発展といってもいいかもしれない。」とする一方で、パチスロは、「娯楽性」と「射倖性」に「技術介入」という特性を加えたことで飛躍的に発展した、と分析している。動きの違いは、パチンコの「静」に対しパチスロは「動」であり、動きの違いに伴ってそれぞれの「技術介入」の度合いも異なってくるとし、さらに、「技術介入」の質についても言及して、その性格的な違いを、「運に対する『受動性』と『能動性』と言い換えることができるかもしれない。」と専門的に説明している。偶然性についても、パチンコが受動的であるのに対し、パチスロは能動的であるとし、特にパチスロについては、「パチスロにおける『能動性』は運を排除するものではない。パチスロにおける『能動性』とは、運を受け入れた『能動性』であり、それは『受動性』も許容しているのではないだろうか。」とし、パチンコとパチスロの大きな違いを、運に対する働きかけの違いとしてみている。

このような分析をスポーツにも敷衍し、スポーツにおける偶然性について、井上や西村を援用しながら論を展開していく。近代スポーツの成立は暴力の抑制による文明化の過程と対応しており、多くのスポーツ種目は、偶然性を排除し能力主義を貫徹させる方向をとってきているが、偶然性に働きかけ、偶然性を楽しむ楽しみ方も受け入れられてきていることを指摘し、パチンコとパチスロの関係を近代スポーツとニュースポーツの関係にアナログして、ニュースポーツを考える際の研究の枠組みの一つとして用いることができるとまとめている。

着想も興味深いし、関連文献もよく整理されている発表であった。ニュースポーツの研究枠組みという安易な論のたてかたよりも、研究の方向性を見極め、更なる展開を期待したい。

## No.12　『プロ野球私設応援団のフィールドワーク』

高橋豪仁(奈良教育大学)

高橋氏は、氏自身の「スポーツにおける応援行動」に関する過去の研究から、応援行動がスポーツ文化の重要な部分であることを自覚し、その発展として、応援団の下位文化を調査するために、ある応援団を事例として取り上げ、フィールドワークを実施し、その結果を報告している。この研究の目的は、「この応援団が、人々の相互作用を通して、絶えずその状況内で再創造され、修正されることによって維持されている様子を描きたい。この集団の文化を記述することによって、日本におけるプロ野球私設応援団の下位文化に迫りたいと思う。」ということに集約される。

対象とした応援団は「全国広島東洋カープ私設応援団連盟　関西支部　神戸中央会」であり、データは、団員と行動を共にする中で観察したことや聞いたこと、会報や定例会での配布物、会員を対象にした質問紙調査の結果などから収集したものである。

今回の発表では、定例会や実際の応援行動、同胞応援団との「つながり」や「いさかい」などが詳細に報告されていた。

私設応援団の演出する場は、「ディアポラスの集合的アイデンティティを形成する場なのかもしれない。」とし、応援行動は、単なる大衆行動ではなく、メンバーにとっては私設応援団のコミュニティを維持する文化的な仕掛けであると分析する。さらに、コミュニティとアソシエーションの概念の再検討を通して、アソシエーションとしての私設応援団がコミュニティの追及の可能性(コミュニティのメンバーとしてアソシエーションをつくる)を有していることを示唆する。

氏のフィールドワークから得られたデータは説得力があり、今後の研究にいっそうの期待がもたれるが、発表が私設応援団の経緯や活動内容に時間がとられ過ぎたことが残念である。

## No.13『メディアスポーツの作られかた―番組制作の生態にメディアの言説の源を見る―』

北岡真幸(関西学院大学)

北岡氏の研究は、氏自身のスポーツ番組プロデューサーとしての経験から、メディアスポーツの作られかたが、スポーツ本来の姿を視聴者に伝えていない、むしろスポーツ本来の価値が第二義的にされてしまっているという問題意識に支えられており、それを研究者の立場から捉えなおし、メディア言説の源に迫ろうとしている。それは、視点を変えれば、

メディア内部組織の研究であり、方法的には、ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズのエスノグラフュカルな番組研究に範を求め、メディア組織と従事者の生態的な記述を通じた研究の必要性を説く。

報告の内容を最大限に抽象化して言えば、メディア言説の源は、番組制作に関わる、あらゆるスタッフの所属する内部組織の構造と規範、および組織間関係の規定性に求められる。それは、スポンサー、プロデューサー、ディレクターからアナウンサー、解説者その他諸々の関係者に至るまですべての人たちを包絡している。

そして、「メディア人ですらすでに自身を取り巻く他のメディアによって、スポーツそのものが制作規範よりも先に観念として決定付けられている。あるいはメディア人の組織内文化がそうさせているのか？メディアの産業的規範や制作慣習がこれらを規定してしまっているのか？を問うていくことが今後の最大の研究・検証の論点ともなろう。」と自問自答している。

氏の発表は、プロデューサー経験という経歴から、内部情報に極めて詳しく、大量の情報を有しているが、フロアから「本発表の落とし所はどこですか」という質問が出されるなど、大量の情報が未整理であった感は否めない。トピックな問題だけに、研究の視座構造を明確に据えた研究の成果を期待したい。

# 一般発表C　座長：西村秀樹（九州大学）

## №14　『中年期女性の運動・スポーツ実施における阻害要因について』

西村久美子(神戸大学総合人間科学研究科)

運動・スポーツの実施を阻害する要因としては家事・育児や仕事による時間的制限が根底にあり、つづいて快・不快経験およびそれによって形成された運動・スポーツへの態度、健康や体力の状況と自己認知、性役割があげられている。また、潜在群(運動したいとは思っているが積極的な実施にはいたらない者)と拒否・無関心群とが分けられ、その両群における阻害要因の違いを考慮している。潜在群では、非実施理由として「時間的余裕がない」をあげるものが圧倒的に多く、拒否・無関心群では、就学期の不快経験の影響が大きく、運動・スポーツへの態度についても「条件のついた肯定」が多く見うけられるということである。この研究においては、妻であり、嫁であり、母であることがいかに自分のための時間(スポーツをする時間等)の確保を困難にしているか、すなわち伝統的な性役割がいまだ強固であること、就学期の快・不快経験が阻害要因として後々まで尾を引いてはいるが、適切な条件や楽しめる環境との出会いがそうした否定的な態度を変容させえているということを明らかにしている点が評価される。今後の課題としては、性役割をより深く掘り下げていくこと、就学期を区切る必要があること(例えば小・中・高)、健康・体力の状況が十分でないことは阻害要因として作用するだけではなく、逆に推進要因にもなりうること、調査にあたって対象者が想定する運動・スポーツのイメージを一定にすることなどがあげられた。また、運動・スポーツ実施の阻害をめぐる「社会学的」バックグランドという観点で、要因分析をより深めていくことが期待される。



## №15　『アクティビティ・サービスの現状と活動分析—高齢者福祉施設を中心として—』

笠木秀樹(新見公立短大)

この研究は、体操や機能訓練(リハビリ)、ゲーム、レクリエーションなどの活動プログラムによって高齢者の生活自体を再び生き生きとしたものにすることを目的とした「アクティビティ・サービス」の現状を考察したものである。現状としては、歌・合唱、体操、レク・ゲーム、手芸、演劇などがよく行われており、「多様性」「創造性」が特色となっている。レクリエーション認識モデルによる分析では、アクティビティ・サービスが開放、身体、心理、交流、活性の５機能別に見られるが、中でも「身体」機能の認識が高いこと、生きがい援助ＰＡ－ＳＲ評価スケールによる分析の結果としては、向上しがい/役立ちがいのタイプＤに属するサービスが圧倒的に多く、次いでくつろぎがい/役立ちがいのタイプＢのサービス傾向が強く、個人の能力を重視し、生きがいをもたせることをめざすものであることが明らかにされている。また、サービスの継続によって深夜や早朝の排泄・失禁などの問題傾向の減少や生活の活性化といった効果があがっていることを報告している。

大筋活動に限定されない広義の身体活動によって身体感覚を活性化することが、身体的機能の維持・向上のためになるだけでなく、生きがいや楽しみの保障にも貢献するといったことが示唆されている。これは、介護をめぐる根本的問題とは何かを明らかにする重要な視点となろう。

# 一般発表D　座長：池井望（神戸女学院大学）

## №16　『地域におけるスポーツ指導者の養成とその活用に関する一考察』

浅沼道成（岩手大学）

本研究は、スポーツ振興における指導者の役割を明らかにするために、岩手県のスポーツ指導員（文部省への登録、1,011 人）、および、同じく岩手県の市町村教育委員会（59 個）に対する調査を通じて、正確な状況を把握し、今後の指導者のあり方を論じようとするものである。その結論をおおざっぱに言えば、各市町村の指導員養成は、きわめて不十分（2 市、4 町=12%）であり、そのような不備をおぎなうために設置されたリーダーバンク制（指導員広域登録制）も認知度が低く（指導者の 40%が、その存在をしらない）、十分な機能を発揮していな、というものであった。

部会の状況報告：統計数字の誤りが指摘されたくらいで、あまり活気な議論には展開しなかった。その理由の一部は、たぶんわれわれ（司会・池井）のような、他の地域、他の専門の会員をまきこむ研究の主張が弱かった点にあるのではないか。リポーター自身の言われるように「今までのバリアを打ち破った、地域の個性」的な報告（たとえば、他府県のスポーツ指導者のデータ呈示、あるいは文化論としての地域スポーツの見方等）をめざしていれば、さかんな討論になったのではないか、が惜しまれる。その意味で、多くの異質の要素を抱えた本社会学会は、最もめぐまれた状況にある。今後の共同研究的方向に期待したい。

## №17　『山梨県・西湖・市民マラソンに関する調査、研究』

山中鹿次（愛知学院大学）

報告書によれば、1980 年代から「市民マラソン」と呼ばれる、健康やレクレーション

を優先する大会が盛んになってきたが、このような大会の本来の理想であるゆとりのある（司会・池井の補足）マラソン大会、つまり観光をともなった大会になっていないうらみがある。その点を実証するために、1998 年 6 月 21 日—西湖にのぞむ足和田村で開催された—第 14 回大会で、参加者の意識調査を行った。その結果、この大会コースの景観に対する評判は高いが、「宮崎・青島・太平洋マラソン」（報告者・調査）、「関門・門司健康マラソン」（富山浩三氏調査、第 50 回日本体育学会発表）と同様、観光のための、ゆっくりとした日程の参加が見られなかった。

状況報告：本質的な議論にならなかったことが残念である。つまり、フロアーからの質問は、調査内容および方法や、ペーパーの不備に対する指摘、報告者の身分所属の書き方、表題の日本語英語の適否に関する疑問等に終始し、時間切れになってしまったからである。この点がなければ、本研究をめぐる討論は、たとえば日本人の「仕事」や「遊び」意識についての問題　一これは、相変わらず、古くて新しいテーマである一　等に発展していく可能性もあったと思われる。そうなればNo.16 で調査された、日本のいわば形骸化しているスポーツ振興の問題とからめて論じることもできたであろう。

## 一般発表D　座長：日下裕弘（茨城大学）

### No.18　『サッカースポーツ少年団の成立展開過程：塩竈市月ヶ丘を事例にして』について

熊谷正也（東北大学大学院）

熊谷氏の柄論文は、塩竈市月見ヶ丘のサッカースポーツ少年団の成立をめぐる諸過程を、「住民の主体性」「住民指導」の視点から、「指導者の情熱とアイディア」および「少年団の父兄の支援と指導者との距離感」を軸に展開したものである。その過程には、同じ住民の主体的活動でありながら、複雑な人間関係の「よそよそしさ」といった生々しい現実の姿があったことが詳細に記述されている。

この研究は、月見ヶ丘の一事例にもかかわらず、地域に根ざしたスポーツがどのような人間の情熱（cult）をもとに、様々な協力・強調／軋轢・反対の人間関係を通じて発展するのか、という地域スポーツの根幹にかかわる本質的な問題を内包している。歴史的な事実の確認もさることながら、その諸過程を生成した担い手の心理・社会的な意識やその意識と社会的・文化的な諸状況などとの関連やメカニズム、そして何よりも「根づく」ということの意味を問う意義をもっていると思う。深みのある事例研究の発展が望まれる。

### No.19　『スポーツ・イベントと地域づくり：福島県東和町・『東和ロードレース』の事例』

佐藤利明（岩手県立大学）

佐藤氏の論文は、福島県東和町の「東和ロードレース」の発展と衰退の歴史を事例に、スポーツ・イベントと地域社会との関係を、「地域づくり」の視点から分析したものである。結論として佐藤氏は、このイベントを核（軸）として地域内外の交流は希薄で、1 日だけの「消化」イベントになっており、こうしたスポーツ「イベント」は「地域とらえなおし」にはなりにくいとしている。

この事例研究も、先の熊谷氏の研究と同じように「根っこ」の問題を中心課題としている。すなわち、人間が地域の中で生活をする、生きていくということの中でスポーツがいかなる位置を占めているのか、また、占め得るのか、という課題である。いかなる制度・



文化、あるいは伝統であっても、それが、ある特定の本質・理念を保持しつつ、時代の潮流にそってその形態を少しずつ変化させていかなければ、成長は望めない。要は、その意義を継承する住民の努力と洗練、そしてアイディアであろう。しかし、それを支えるのは、また「地域への想い」や「経済生活」という根っこの部分である。地域づくりにおけるスポーツの位置づけの課題は、空白のある奇妙な循環をめぐる問題に思えてくる。その空白を研究者の立場から埋めていくのがこうした事例研究の大きな使命となるのではないだろうか。

## 第9回大会参加記

挾本佳代　（法政大学講師）

身体論が社会学領域で論じられるようになって久しい。しかし、こと社会学は近代以来の「身体」に注目はしてきたけれど、果たして近代以前の「身体」を深く論及してきたであろうか。これが今回「身体の近代」テーマセッションにおいて、「身体と文化の理論の源流」という題目で発表させていただいた動機である。

しかし、この私の問題意識が短い制限された時間内で、どれだけフロアーの方々に伝わったかどうかについては些か不安なところがある。

当日の発表において最も主張しておきたかったことを再度繰り返すならば、それは 2 点ある。第 1 に、そもそも「身体論」とは「人間がいかなる存在であるのか」もしくは「人間がいかなる存在であったのか」という問題を本来的に抉り出すはずの理論なのではないか、ということ。第 2 に、私たちが「身体論」という言葉に言及する時には、この社会学的にも非常に重大な問題はすでに織り込み済みであると認識していなければならないのではないか、ということである。つまり言い換えるならば、私たちは「身体」という言葉に言及しさえすれば、あたかもデカルト以来の心身二元論から脱却することができ、なおかつ「人間がいかなる存在であるのか」という問題をすべてクリアに解決することができると過信してはならないということだ。この 2 点に照らして、ブームに乗って増産された数多くの身体論を再検討する時期にそろそろきているのではないだろうか。

「人間がいかなる存在であるのか」という問題を追究する際、鍵となる概念は「自然」と「システム」である。人間が他の生物とともに「自然」の中で共生することができるのか、それとも人間だけが他の生物から隔離された「システム」の中で生きるのか。この問題を深く社会学的に論じていたのがハーバート・スペンサーであり、ブロニスラフ・マリノフスキーであったのだ。当日のテーマセッションで「身体論を論じるにあたって、果たしてスペンサーまで戻る必要があるのか」というご質問をいただいたが、逆にスペンサーがいまから 150 年前にすでに提起していた問題に社会学およびその周辺学問領域が深く論及してこなかったために、「身体論」という形で再び人間の存在を問う問題が興ってきたのではないだろうか。それだからこそ、一見「身体論」とは無関係のように思われるが人間存在の核心をついていたスペンサーやマリノフスキーの論理をその源流と位置づけ、社会学は「身体論」に論及することが必要であると私は考えている。

（最後に、大会当日このテーマセッションで私が黒板に図示させていただいた拙い図をカメラにおさめていた方がいらっしゃったように記憶しているのですが、もし焼き回しなどしていただけると嬉しいのですが。メール等でご連絡いただけると幸いです。）

# 『第9回大会を振り返って』

田中研之輔　（筑波大学大学院）

「もう、準備はできている。僕の仕事は発表だけだよ。」と言い、生ビールを追加。学会での講演を明後日に控え、長旅の疲れも見せず飲み続ける Donnelly 先生の勢いに私達は完全に飲まれた。松村先生のご縁で Donnelly 先生と Porro 先生と院生で夕食を共にした後の、2 次会でのことだった。私達は自身の素朴な疑問やカナダでの生活、大学、家族について等あらゆる質問を先生に投げかけた。それに対する先生の親切すぎるほどの返答や適切なアドバイスが印象深い。その中でも「妻の誕生日までに帰れるかどうか心配だよ。」と照れながら語り、すかさず国際電話をかけにいった先生の姿に人柄の良さと温かさを感じた。先生が創り出す和やかな雰囲気に酔いしれ、時があまりにも早く過ぎた。

私にとっての第 9 回大会はこうして始まった。特別講演で Donnelly 先生は、スポーツと戦争との類似点を挙げ、その中でも唯一類似した特徴である“リスクを冒すこと”（risk - taking）について述べた。先生は幅広い学術的な視点と自身のスポーツ経験、ロッククライミング体験から身体的リスクを伴うスポーツ領域について検討し、直接的な身体のリスクを冒すタイプが主に若い男性（15 - 25 歳）に多いことに注目した。そして、その社会的な背景に性格（character）、アイデンティティ（identity）、僚友関係（comradeship）があることを明らかにした。しかし、私はその結論付けでは捉えきれない文脈があるように感じている。“リスクを冒す”ためにスポーツを選ぶの？とか、なんで続けているの？といった疑問にはどう対処するのか。これについては大会２日目のキックボクサーの身体に関する山本氏の発表が新たな視座を与えていた。

一般発表では松田先生のテレビゲームの他性と身体に関する研究と高橋先生のプロ野球施設応援団のフィールドワークに関する研究のどちらもが現代社会の文化現象を考察したもので、また妙に対照的だった。松田先生はテレビゲームがどこまでスポーツと呼びうるのかについて、テレビゲームの身体性とスポーツにおける身体性が同化していくような現象の事例を挙げた。議論はスポーツってなんだ？スポーツとする、しないの境界の線引きは果たしてできるのだろうか、という究極的なものまでに発展した。今後益々バーチャル・リアリティとしてのスポーツ体験や実践は進む。現代社会の中のスポーツやスポーツからみた社会、つまりスポーツの位置を再認識すべき時期に直面しているのである。

高橋先生の研究は素直に引き込まれた。先生は実際にトランペット隊として応援団の中で役割を確立し、定例会（飲み会？）に参加してきた。応援団は義理を重んじ、ある意味組織化され、強固なものも見てとれる人々の集まりである。団員は集まることの心地よさを感じながら、より親密なコミュニケーションを図っていく。カープを応援するという共有関心の充足を前提としたアソシエーションの形成が明らかにされた。プロ野球ファンって、こうなんだろうな。応援団の文化から人々のつながりの様々な様相がみえてくる。これは清水先生の浦和レッズのファンに関する研究と関連させるとスポーツファンの文化をさらに深く広く捉えることができるのではないだろうか。

「身体の近代」のテーマセッションは議論も活発に行われ、大変興味深かった。挾本氏の発表は、身体と文化の理論の源流を H. スペンサーや B. マリノフスキーから探求していく。詳細や根拠は『社会システム論と自然』という本に書かれているそうなので私もこれから読んでみたい。自然という定義に関しても議論され、亀山先生の超社会化の概念を用いたやりとりにまで発展し抽象度があがった。それと同時に私は取り残されていった。



菊先生は学校体育の現状の体罰に代表される暴力について N ・エリアスの視点に依拠し、近代的身体に現われる秩序形成の問題や体育の役割を暴力独占の形態から明らかにした。結論では具体的な指摘がされ、現場での可能性を強く感じた。また、この原稿を書いている最中刃物を持った高校生によるバスジャックや殺しの経験がしたくて婦人を殺害する事件が起こった。亀山先生の超社会化の理論を用いればこれらの高校生を理解することは可能だが、菊先生はこのような現状をどう捉えるのか伺ってみたい。

倉島氏は武術教室で使われる「線」「勁」「気」の言葉自体が身体的プラクティスや行為者のアイデンティを構成する点に迫り、客観性を構築する方法論の限界についてブルデュー批判を交え発表した。

山本氏はキックボクサーの身体に注目した。格闘する身体は規律訓練された「従順な身体」では論じきれないとし、突如として現われ、暴力性をも持つような「プリミティブな身体」が存在することを明らかにした。また、彼らが格闘技を始めた動機は欠如を感じさせるそれぞれのハングリーとするが、格闘し続ける理由は本人達の意識には上がってこないことを指摘する。そして、そこにこそ彼らの格闘し続ける理由があるのだと述べる。

Donnelly 先生のリスクを冒す若者という視点では捉えきれない、「何か」がそこにはある。それは倉島氏が述べた方法論的な限界なのだろうか。今回の山本氏と倉島氏の発表で浮かび上がったことがある。それは彼らがフィールドを通して確実に「何か」を捉えたことだ。その「何か」を伝えるために倉島氏は「線」を示す身振りを交え、また山本氏はロッカールームでのキックボクサーの状況を捉えた VTR を流した。つまり、彼らは性格、ジェンダー、アイデンティティ、階級等の社会的文脈に落とし込んでその理由や結論を導きだすのではなく、武術教室で使われる言説そのものや格闘する身体そのものが意味する「何か」を新たに提示しようとしたのである。ここで私自身も言葉で表現することができず、「何か」とした。私達にはスポーツする身体やその現場に確実に存在する「何か」を捉え、言葉にし、読み解いていく作業が今後求められているのであろう。

私は勢いのまま学会を振り返り参加記とした。ここでの視点や関心はあくまで私の現時点での感想や解釈である。次回第 10 回大会は筑波で行われる。私自身リスクを冒すことを恐れず前進していきたい。

# 理事会報告

第6期第3回理事会報告

日時：　2000年3月26日（上智大学3号館１１：００－１２：００）
出席：　井上（会長）、森川（理事長）、
編集委員会…佐伯（編集委員長）、荒井、松村、野川、清水
研究委員会…亀山（研究委員長）、江刺、池井、中島
国際交流委員会…山口（国際交流委員長）、リー・トンプソン、野川
ホームページ委員会…杉本（委員長・非理事）
事務局…小椋（事務局長）、小谷、松田（会報幹事）、野崎・依田（庶務幹事）
今期学会大会…生沼（サイトコーデイネーター）

議題：総会議案について

(1)報告事項（詳しくは各委員会報告参照）

1　編集委員会（佐伯委員長より）
「スポーツ社会学研究第8巻」の発刊の経緯・決算等について報告された。
第8号から広告を掲載し、編集費の補助に当てた。

2　研究委員会（亀山委員長より）
第9回大会（上智）、第10回大会（筑波）のシンポジュウムなどの持ち方・趣旨説明などがなされた。

3　国際交流委員会(山口委員長より)
平成11年度・１2年度の国際学会などについて報告された。

4　ホームページ委員会（杉本委員長より）
杉本委員長が海外研修のため、委員長の代理を、トンプソン委員が務めることになった。

5　事務局（森川理事長・小椋事務局長より）
平成11年度新入会員（最新分）のリストが紹介され、会員数（正・学生会員）が335名となり、年間40名の増加であった。このため予算にこれまでと比べ若干のゆとりが生まれる。
次回第6期第4回理事会は平成１２年１０月９日午後、奈良女子大学で。

(2)審議事項

1　平成11年度事業報告・決算案について
決算案の支出の内訳に基づき事業内容が報告され、決算に付いては監査結果が報告・承認された。（別紙資料参照）

2　平成12年度事業計画・予算案について
予算案の支出の内訳に基づき事業内容が報告され、予算の内容を含めて承認された。

3　その他
日本学術会議会員の候補推薦人を森川理事長にお願いし、推薦にあたっては社会学会からの候補者を中心に選考する。
フランク・カス出版社から申し出のあった会員名簿の貸し出し（有料）と理事選挙の資格について、委員長会議で原案作成し理事会に諮ることとなった。



年2回の理事会審議の補充として、年1回の委員長会議（時期学会大会開催責任者を含む）を開く。
第10回学会大会は平成13年3月26・27日（月・火)、筑波大学で開催される。

# 総会報告

1999（平成11）年度　日本スポーツ社会学会総会報告

(1)日時　平成12年3月２６日
(2)場所　上智大学
(3)進行（森川理事長）

1　会長挨拶（井上会長）
2　議長選出：鈴木守（上智大学）
3　議事（前記各種委員会報告及び理事会報告を参照ください。）

（1）　報告事項
① 理事会報告
② 編集委員会報告
③ 研究委員会報告
④ 事務局報告
⑤ その他

2）　審議事項
① 平成11年度事業及び決算について（監査報告を含む・別紙資料参照）
理事会での原案通り、承認。
② 平成12年度予算及び事業計画について。（別紙資料参照）
慶弔費などの項目と予備費を分けるなど、若干の考慮すべき点が指摘されたが理事会の原案通り承認。）
③ 平成12年度　第10回学会大会の開催地及び時期：平成13年3月26・27日（月・火）に筑波大学で。なお希望として、他の学会大会と重ならないように開催時期を決定してほしいという意見が紹介された。

## 平成１１年度予算書

収入の部：１，９４４，５５９円
支出の部：１，９４４，５５９円
差引残高　　０円

1　収入の部

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | ４９４，５５９ | 前年度繰越金 |
| 会　費 | １，３００，０００ | 正・学生・購読会員費 |
| その他 | １５０，０００ | 広告費、機関誌売上げ費 |
| 合　計 | １，９４４，５５９ | |

2　支出の部

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 機関誌関係 | ７００，０００ | 印刷費、編集費 |
| 会報　関係 | １３０，０００ | 印刷費（No.２３－２５） |
| 通信事務費 | ２８０，０００ | 会報・機関誌等郵送費、事務郵送費 |
| 理事会経費 | ２５０，０００ | 交通費補助、研究プロジェクト経費 |
| 事務局作業費 | １５０，０００ | 作業補助（事務・会報等）、文具等 |
| 学会大会補助 | ５０，０００ | 第９回大会事務局への補助 |
| その他 | １５，０００ | 振り込み手数料等 |
| 予備費 | ３６９，５５９ | 慶弔費等 |
| 合　計 | １，９４４，５５９ | |



## 平成１１年度決算書（３月１５日決算）

収入の部：２，０８８，４６６
支出の部：１，４６９，８８６
差引残高：６１８，５８０

1　収入の部

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | ４９４，５５９ | 前年度繰越金 |
| 会　費 | １，４５６，０００ | ３／１５現在会員３４９人中１１年会費未納７４人 |
| 機関誌売上げ | ４６，５７４ | |
| 広告費 | ９０，０００ | 協賛会員年度会費（３万円が３社） |
| 雑収入 | １，３３３ | 利息など |
| 合　計 | ２，０８８，４６６ | |

3　支出の部

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 機関誌関係 | ７００，０００ | 印刷費、編集費 |
| 会報関係 | １４３，０１０ | 印刷代（No.２３－２５） |
| 通信事務費 | ２４８，２９３ | 会報２３－２５・機関誌等郵送費 |
| 理事会経費 | １５０，０００ | 交通費補助、研究プロジェクト経費等 |
| 事務局作業補助 | １４２，８３３ | 作業補助、文具等 |
| 学会大会補助 | ５０，０００ | 第９回大会事務局への補助 |
| その他 | １３，１５０ | 振り込み手数料 |
| 予備費 | ２２，６００ | |
| 合　計 | １，４６９、８８６ | |

上記の決算書を監査した結果 適正に処理されていることを認めます。
平成12年3月19日
西垣 克彦 (西垣)
中島豊雄 (中島)

## 平成１２年度予算書（案）

**収入の部：２，２６８，５８０円**
**支出の部：２，２６８，５８０円**
**差引残高：０円**

**1　収入の部**

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | ６１８，５８０ | 前年度繰越金 |
| 会　費 | １，５００，０００ | 正・学生・購読会員費 |
| その他 | １５０，０００ | 広告費、機関誌売上げ費 |
| 合　計 | ２，２６８，５８０ | |

**2　支出の部**

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 機関誌関係 | ７００，０００ | 印刷費、編集費 |
| 会報　関係 | １５０，０００ | 印刷費（No.２６－２８） |
| 通信事務費 | ２８０，０００ | 会報・機関誌等郵送費、事務郵送費 |
| 理事会経費 | ３００，０００ | 交通費補助、研究プロジェクト経費 |
| 事務局作業費 | ２００，０００ | 作業補助（事務・会報等）、文具等 |
| 学会大会補助 | １００，０００ | 第１０回大会事務局への補助 |
| その他 | １５，０００ | 振り込み手数料等 |
| 予備費 | ５２３，５８０ | 慶弔費等 |
| 合　計 | ２，２６８，５８０ | |



# 編集委員会からのお知らせ

――『スポーツ社会学研究』の投稿に関するご案内――

◆今年度の投稿に関して
例年通り、『スポーツ社会学研究』への投稿のご案内をいたします。多くの投稿をお待ちしています。

○締め切り　８月 25 日（金）　（当日消印まで有効）
○投稿先　〒305-8574
茨城県つくば市天王台１－１－１
筑波大学体育科学系　佐伯聰夫研究室気付
日本スポーツ社会学会　編集委員会
○投稿要領　『スポーツ社会学研究』第８号（2000）　139－141 頁参照

◆投稿の流れと査読における評価基準に関して
昨年度の反省から、『スポーツ社会学研究』に投稿された諸論文の査読のスケジュールと査読の評価基準を、あらかじめ会員の皆様にお知らせします。

○進行スケジュール
8 月 25 日　：　投稿締め切り
10 月上旬から中旬　：　投稿者に一回目の査読結果通知
11 月上旬　：　修正論文再投稿締め切り
12 月上旬　：　投稿者に最終査読結果通知
12 月中旬から下旬　：　最終原稿フロッピー入稿

○査読における評価基準
1.一回目の査読における評価基準（査読者に 10 月に通知する分）
A：修正をしないで掲載できるもの
B：少しの修正によって掲載できるレベルに達すると思われるもの＊
C：掲載できるレベルに達するにはかなりの修正を要すると思われるもの＊
D：修正を加えても掲載できるレベルに達する見込みがないもの
＊修正期間は例年２?３週間程度しかありません。その短い期間で修正できる可能性が高い　ものがB、かなり厳しいものがCとなります

2.最終決定における評価基準（査読者に 12 月に通知する分）
A：今回の号に掲載するもの
B：今回の号には掲載できないが、次年度の号に掲載できる可能性が高いもの（掲載できるまでの修正が達成されていないが、後１回程度のやりとりを経れば最終的に掲載できるレベルに達すると思われるもの）
D：このまま修正を繰り返しても掲載できる見込みがないもの

# 国際学会通信

## エール大学国際会議「近代日本におけるスポーツと身体文化」

**Sports and Body Culture in Modern Japan**
**An International Conference at Yale University**

杉本厚夫（京都教育大学：エール大学・ロンドン大学留学中）

＜寝耳に水であった＞

ニューヨークから北へ電車で1時間半、コネチカット州ニューヘブン（New Haven)に着く。移動は車と飛行機と思っていたアメリカで、電車の旅とはちょっとしたカルチャーショックだ。かつては拳銃と時計の生産で栄えた町だったが、今はその面影はなく、エール（YALE）大学だけが際立つカレッジタウンとなった。

エール大学は 1703 年創立だから、300 年の伝統を持つアイビーリーグの名門である。その風格は、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学に似て、まるで中世の城のようである。図書館は教会のような重厚な建物であり、その蔵書の数は全米2位だと言う。アメリカの大学の建物は寄付によるものが多いが、ここの体育館もある婦人の寄付で建てられたものである。その婦人は、教会を寄付したかったのだが、大学側は体育館が欲しかった。そこで、外から見ると教会になっているが中身は体育館といった一風変わった体育館になったのだと言う。

話は2年前に遡る。突然、エール大学の文化人類学部長のケリー（William WKelly）さんから、奈良女子大学の菊さんから紹介されたと言って電話がかかってきた。彼は阪神タイガースの応援団の研究をしていると言う。ちょうどそのころ私も『スポーツファンの社会学』（世界思想社）を編集し、その中で、阪神タイガースの応援団に注目した論文を発表していた。話題は応援団の話から、日本の文化全般に及び尽きなかったが、いつのまにかエール大学で日本のスポーツや身体文化についてのシンポジウムをいっしょに企画しませんかというお誘に変わっていた。私にとっては、寝耳に水と言った感じで戸惑ったが、流暢な日本語をおしゃべりになり、お人柄の良いケリーさんのマジックにかかってしまい、「やりましょう」と気がつけば返事をしていた。

エール大学図書館

＜会議のオーガナイズする＞

その年の秋に、ラスベガスで北米スポーツ社会学会があり、その帰りにエール大学によって、具体的な話を進めることにした。とりわけ、どのようなコンセプトでシンポジウムを開くのかという基本的な打ち合わせが必要であった。エール大学の中世を彷彿させる魅力的な建物を見たときに、この会議の成功を直感した。なぜなら、このような雰囲気の中でこそ、日本の近代化について創造的な論議が可能である強く思ったからである。そこでテーマは「近代日本におけるスポーツと身体文化」に決まった。また、目的はこれからの研究者に刺激的なシンポジウムにしていくことで一致した。

そこで、パネラーもできるだけ若いくて、荒削りでも良いから刺激的な研究をしている人を選ぶことにした。そして、日本からのパネラーの人選を任された私は、幸いなことにその時、井上俊先生と亀山佳明先生の編による『スポーツ文化を学ぶ人のために』（世界思想社）の編集をお手伝いしていたし、私自身、「体育教育を学ぶ人のために」（世界思想社近刊）の編集を手がけていたものだから、比較的、日本の中でどのような人がどのような研究をしているかを把握することができた。また、近くに菊さんという頼りになる相談相手がいて下さったことも幸いであった。そこで、日本の近代化と身体文化について、ユニークな研究を行っていて、しかも他の研究者とテーマが重ならないという点から、菊幸一さん、清水諭さん、高橋豪仁さん、リー・トンプソンさん、黄順姫さん、山下高行さん、吉見俊哉さんを招聘することにし、声をかけたところ、皆さん快諾してくださた。これで、半分以上は成功したと確信した。

次は、どのようなシンポジウムにしていくかといった形式やスケジュールである。それぞれのパネラーの能力を最大に引き出すような場を設定しなければならない。これも幸いなことに、私は 1997 年の立命館大学で行われた日本スポーツ社会学会の国際シンポジウムの世話もさせていただいたので、ある程度のノウハウは持っていたし、どんなシンポジウムにしたいのかという自分なりのイメージもできつつあった。とりわけ私が強調したことは、日本の近代化を相対化して論議しようとするのであるから、近代的時間に追われることもなく、お互いの文化を超えて、話せるスケジュールにしたいということであった。そこで、発表は欧米と日本から二人または三人でセッションを組み、できるだけ似通ったテーマを設定するようにした。そして、発表は英語で質疑応答は日本語で最後にまとめてするという日英混合型となった。

また、キーノートレクチャーも考えたが、東西の研究者交流も目的のひとつであるこの会議の性格上、それは必要ないという結論になった。ちなみに欧米からの参加者は、オーストラリアからパチンコの研究でも有名なマンツェンライター（WolframMANZENREITER）さん、英国からＪリーグの研究で日本でもお馴染みのホーン（JhonHORNE）さん、米国からは、『スポーツと現代アメリカ(From Ritual to Record)』の著作で日本ではあまりにも有名なグートマン（Allen GUTTMANN）さん、相撲部屋で住みこみで研究をしていたタニー（R. Kenji TIERNEY）さん、日本のフィットネスクラブの研究をしているギンズバーク（Laura GINSBERG）さん、日本女子サッカーＬリーグでプレイし、日本のナショナルチームのコーチ経験があるエドワーズ（Elise EDWARDS）さん、と実に多彩である。

後は経済的なサポートであるが、スポンサーにはエール大学の東アジア研究所（The Council on East Asian Studies Yale University）がなってくれた。日程も、日本スポーツ社会学会の日程を避け、2000 年の 3 月 31 日と 4 月 1 日に設定し、4 月 2 日はメンバーだけでこの会議についての報告書のためのミーティングを持つことにした。

このように、米国で日本と欧米で合同してやるシンポジウムは始めてであり、それだけに、打ち合わせには時間を必要としたが、幸いにもＥメールのやり取りが非常に有効であった。しかも、Ｅメールでの打ち合わせは、こちらは日本語で、ケリーさんからは英語で送られるという一風変わったやり取りになった。それも言葉の壁を超えて、いっしょにや

って行きたいと言う気持ちの現れである。パネラーの原稿もすべてＥメールで処理し、ホームページも開くことができた。ケリーさんの返答はいつも迅速かつ適切で、会議の詳細を決定することができた。また、事務局のショサナ（Shoshana）さんが、繁雑な事務的な手続きにすべて的確に対処してくれた。国際会議では、このような事前のコミュニケーションがうまくいくかどうかで、その成功が決まると言っても過言ではない。

シンポジウムを終えて

＜笑いが成功の秘訣＞

以上のような準備を経て、いよいよ会議が始まった。公開シンポジウムの打ち合わせを兼ねて、カレッジの食堂で昼食をとった。英語と日本語が入り混じって楽しく会話が進み、最後に、ケリーさんから今回のシンポジウムのロゴが入った帽子をパネラー全員に頂き、一同いたく感激したものである。

発表会場は、文化人類学部の近くの近代的なルースホール（Lecture Hall of LuceCenter）で行われた。瀟洒な建物だが、とても暖かい感じで、家庭的な雰囲気を漂わせており、今回の会議には相応しい会場である。日本からは招待のパネラー以外に、香川大学の野崎さんと筑波大学の大学院生３名が一般参加した。

それぞれの発表は文末に示したように、非常にユニークで、テーマである「近代日本におけるスポーツと身体文化」に相応しい発表内容である。発表はスライドやビデオを使って、とても分かりやすく、しかも刺激的なものとなった。「文化的差異の笑い」と私はよんでいるが、我々が持っている身体的なハビトゥスに気づき、思わず笑ってしまうことがしばしばあり、とても和やかで、しかも刺激的な会議は、日本ではなかなか経験できないことであり、とても印象的であった。

また、初日の夜に見た日本の映画、『がんばっていきまっしょい（GIVE ITALL）』は、日本の近代化の中で、スポーツに付与された「がんばる」ことの意味を、身体文化の面から再考する上で、とても有意義な機会を提供してくれたと同時に、とても感動的で、会議の雰囲気を盛り上げるのに寄与した。レセプションを始めとするこれら心のこもったエール大学のホスピタリティに、参加者の皆さんには満足していただいたようである。

さて、肝心の発表の中身であるが、それをお伝えする紙面がなくなってしまった。発表の中身については、来年米国から出版する予定であるので、それを読んでいただければ幸いである。多分この会報が皆さんの手元に届くころは、私はエール大学でその本の編集の仕事をしているときだと思う。

（エール大学の研究室にて）



# 掲示板

下記の要領でシンポジウムが開催されます。問い合わせ等ございましたら、開催事務局の前林(神戸学院大学 078-974-1551)もしくは松田(岡山大学 086-251-7666)までご連絡下さい。

## 国際シンポジウム 2000－「気」と身体運動文化－

**主催：身体運動文化学会**

**共催：神戸学院大学**

**協賛：須磨学園（予定）、アシックス（予定）、セノー（予定）**

**後援：兵庫県、神戸市、明石市（予定）兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、明石市教育委員会、朝日放送、サンテレビ、神戸新聞社、神戸おくさま新聞、（財）地球学校**

**日時：2000 年 11 月 11 日（土）・12 日（日）**

**場所：神戸学院大学　　メモリアルホール**

**＊タイムスケジュール**

**前日**

| | |
|---|---|
| 前夜祭 | 19：00～21：00 |

**第１日目**

| | |
|---|---|
| 受付 | 8：00～ |
| 総会 | 8：20～8：50 |
| 一般研究発表 | 8：50～10：40 |

---

| | |
|---|---|
| 会長挨拶 | 10：45～10：55<br>高橋進会長（筑波大学名誉教授） |
| 開催校挨拶 | 10：55～11：00 |
| ミニコンサート | 11：00～11：45<br>伍　芳（中国古箏演奏者・東芝 EMI） |
| 昼休み | 11：45～12：25<br>＊ポスター発表 |
| 記念講演 | 12：25～13：25<br>津本　陽（作家） |
| シンポジウム基調講演 | 13：25～14：05<br>湯浅泰雄（桜美林大学名誉教授） |

### 第１セッション＜気と癒し・養生＞

シンポジウム　14：05～16：50

パネリスト：山中康裕（京都大学）
：胡暁飛（北京体育大学）
：銭愛珠（上海市気孔研究所）
：丸山敏秋（倫理研究所）

コーディネーター：田嶋正人（プール学院大学）

レセプション　19：00～
ルミナス（神戸港クルージング・パーティー）

### 第２日目

受付　8：00～

### 第２セッション＜気と武道＞

シンポジウム　9：00～11：40

パネリスト：李　天植（延辺大学）
：時津賢児（パリ大学）
：金　基周（韓瑞大学校）
：大保木輝雄（埼玉大学）
：洪　木諫（上海華東政法学院）

コーディネーター：酒井利信（清真学園女子短期大学）

パフォーマンス　11：40～12：10
少林寺拳法

昼休み　12：10～13：00

特別講演　13：00～14：00
沢松奈生子（元プロテニスプレイヤー）

### 第３セッション＜気とスポーツ＞

シンポジウム　14：05～16：45

パネリスト：本村清人（文部省）
：ジョンラグリン（インディアナ大学）
：長谷川健太（元プロサッカー選手）
：　交渉中
：豊田一成（滋賀大学）

コーディネーター：加藤純一（目白大学）

シンポジウム閉会の辞　16：45～16：50
二杉茂（神戸学院大学）



# 掲示板

## 国際シンポジウム2000－「気」と身体運動文化－

主催：身体運動文化学会
共催：神戸学院大学
協賛：須磨学園（予定）、アシックス（予定）、セノー（予定）
後援：兵庫県、神戸市、明石市（予定）兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、明石市教育委員会、朝日放送、サンテレビ、神戸新聞社、神戸おくさま新聞、（財）地球学校
日時：2000年11月11日（土）・12日（日）
場所：神戸学院大学　メモリアルホール

### ＊タイムスケジュール

### 前日

前夜祭　19：00～21：00

### 第１日目

受付　8：00～
総会　8：20～8：50
一般研究発表　8：50～10：40

---

会長挨拶　10：45～10：55
高橋進会長（筑波大学名誉教授）

開催校挨拶　10：55～11：00

ミニコンサート　11：00～11：45
伍　芳（中国古箏演奏者・東芝EMI）

昼休み　11：45～12：25
＊ポスター発表

記念講演　12：25～13：25
津本　陽（作家）

シンポジウム基調講演　13：25～14：05
湯浅泰雄（桜美林大学名誉教授）

### 第１セッション＜気と癒し・養生＞

シンポジウム　14：05～16：50

パネリスト：山中康裕（京都大学）
：胡暁飛（北京体育大学）
：銭愛珠（上海市気孔研究所）
：丸山敏秋（倫理研究所）
コーディネーター：田嶋正人（プール学院大学）
レセプション　19：00～
ルミナス（神戸港クルージング・パーティー）

**第２日目**

受付　8：00～

## 第２セッション〈気と武道〉

シンポジウム　9：00～11：40
パネリスト：李　天植（延辺大学）
：時津賢児（パリ大学）
：金　基周（韓瑞大学校）
：大保木輝雄（埼玉大学）
：洪　木諫（上海華東政法学院）
コーディネーター：酒井利信（清真学園女子短期大学）
パフオーマンス　11：40～12：10
少林寺拳法
昼休み　12：10～13：00
特別講演　13：00～14：00
沢松奈生子（元プロテニスプレイヤー）

## 第３セッション〈気とスポーツ〉

シンポジウム　14：05～16：45
パネリスト：本村清人（文部省）
：ジョンラグリン（インディアナ大学）
：長谷川健太（元プロサッカー選手）
：　交渉中
：豊田一成（滋賀大学）
コーディネーター：加藤純一（目白大学）
シンポジウム閉会の辞　16：45～16：50
二杉茂（神戸学院大学）



日本スポーツ社会学会　学生会員の皆様

## 学生ネットワーク（仮）を発足させませんか？

学生会員の皆様に、今回一つ提案したいことがあり、お知らせしました。
それは、学生ネットワーク（仮）を作り、学生間の交流をもっと盛んにしていこうという試みなのです。具体的には、あまり決まっていないのですが、学会の時に学生だけの交流会をもったり、勉強会（合宿）などをやったりと、お互いの研究について熱く語る機会をもちたいと考えています。
まずは、メールでのやり取りを通じでこの会の形を作っていきたいと思います。少しでも興味をもたれた方は、下記まで連絡下さい。
新しい試みで、不手際が多いと思いますが多くの方の参加を心待ちにしています。

岡山大学大学院　小坂美保
浦田八千代
藤澤貴幸
合田尚樹

連絡先　E-mail：

（小坂メールアドレスまで）

# 嘉戸脩先生の逝去を悼む
## －スポーツ社会学と嘉戸先生－

菊　幸一

日本スポーツ社会学会発足から２期４年間にわたって監事を務められ、私の大学時代の恩師でもある嘉戸脩先生が昨年９月６日未明、享年６２歳で逝去された。定年退官まであと残すところわずか６ヶ月という、誠に無念の思いが残る死であった。

ところで、私の大学の研究室のガラス付書棚に、「嘉戸用箋」という小さな文字の　入った原稿用紙１８４枚にも及ぶ嘉戸先生の修士論文（昭和４４年度東京教育大学）のコピーが大切に保管されている。論題は「わが国におけるスポーツの変容に関する研究－スポーツと武士道との関連から－」。この論文は、後に先生が『体育社会学入門』（菅原禮編著、大修館書店）の中で分担執筆された「社会変動と体育」という章の原型をなしており、今日の体育・スポーツ領域を対象とする本格的な社会変動論、あるいは歴史社会学的研究の１つと考えることができる。すでにM．ウェーバーの方法論や富永健一の『社会変動の理論』をベースにして、わが国のスポーツの近代化にみるタテマエとホンネ、内発的要因と外発的要因、タイム・ラグなどを武士道的な精神の社会的機能から鋭く読み解く先生の考察は、その後のスポーツ社会学における歴史社会学的研究の位置づけを考えるとき、その基礎を形成した嚆矢の１つとして評価されてよいように思われる。

また、先生は１９７０年代半ば頃からのランニングブームにいち早く目をつけられ、「ランニングブームの社会的背景とランニングの現状・問題」や、今日の生涯スポーツと学校体育との関係に関する基礎的、実証的な研究として「スポーツ活動の多元クロス分析の試み」を論文として発表され、今日のスポーツ現象を社会学的実証主義の立場から分析する先鞭をつけられた。この両論文が大学の紀要論文として発表されたにもかかわらず、その後の引用回数が非常に多いのも、その一証左とみることができよう。

私が最期に嘉戸先生とお話したのは、亡くなられる２ヶ月余前、１９９９年７月２日の日本体育協会での会議終了後、２人で渋谷の繁華街をぶらぶら歩きながら喫茶店で過ごしたわずか３０分ほどの時間であった。そのとき、先生は自分が最後にやっておきたい仕事の１つとして、冒頭に紹介した修論をベースにした１冊の研究書をまとめあげることを挙げておられた。その折、私は何気なく、研究者というのは最後には誰しもが初心に返って歴史家になりたがるものなのでしょうか、とその心境をお尋ねしていたように思う。

しかし、嘉戸先生は、その願いを果たすことなく、黄泉の国に旅立たれてしまった。私の書棚に残された先生の修士論文は、今後のスポーツ社会学を担うわれわれに何を語りかけようとされているのか。本来、先生が直接書き残すべきはずの事柄を、われわれへの宿題として残しながら・・・



# 新入会員

| 氏名 | 住所 | Ｔｅｌ／ＦＡＸ | 所属<br>Ｔｅｌ／ＦＡＸ |
|---|---|---|---|
| おさかみほ<br>小坂美保 | | | 岡山大学大学院 |
| おのせたけし<br>小野瀬剛志 | | | 東北大学大学院 |
| たじまよしてる<br>田島良輝 | | | 早稲田大学大学院 |
| さことしみち<br>迫　俊道 | | | 広島市立大学大学院 |
| えなみけんじ<br>江南健志 | | | |
| やまもとたくじ<br>山本拓司 | | | 慶応義塾大学大学院 |
| にのみやまさや<br>二宮雅也 | | | 筑波大学大学院 |
| なかがわとしこ<br>中川敏子 | | | |

*会報２５号記載事項の訂正*

うちうみかずお
内海和雄　　一橋大学社会学研究科

ミヒャエル・エーレンライヒ
Michael Ehrenreich　　筑波大学大学院

*連絡先等の変更*

金　恵子
（E-mail）

橋本政晴
（自宅）

橋本純一

山田ゆかり
（自宅）

村田雅之
（勤務先）　　早稲田大学大学院

志岐幸子

伊藤克広　神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期
（所属）

原田　達

立命館大学産業社会学部

黄　盛彬



挾本佳代　法政大学
（所属）
佐川哲也
（自宅）

中山　健
（自宅）
（所属）

松尾哲矢
（自宅）
（所属）

金　大勲
（E-mail）

観行智信

*住所不明者*

大田義孝　小久保信幸　松浦義行　鈴木文明　横井康博

*退会*

東谷拓　山本英毅

*訃報*

藤田匡肖

# 編集後記

スポーツ社会学会会報第 26 号をお届けいたします。3 月の学会大会の熱気を、再びお伝えできればと思います。(K.M)

紫陽花の花が、雨に咲くぼんぼりのように鮮やかな灯をともしているように見える頃となりました。今号は、第 9 回大会の特集を組んでおり、私たち院生も発表をし、発表に対するコメントをいただいており、記念すべき号となりました。ところで、会報の編集に携わり 1 年が経とうとしております。去年の今頃、訳も分からず会報を作っていた頃が懐かしく思い出されます。時が経つのが早いのか、私たちが成長（？）しているのでしょうか。本当に、「時」というものの意味を考えされられる長雨です。(M.O)

日本スポーツ社会学会会報　第 26 号

平成 12 年 6 月 30 日発行
日本スポーツ社会学会事務局
（香川大学教育学部内）

◎学会への連絡、および入退会、住所・所属変更、会費納入、その他の各種手続きに関しましては、事務局までお願いいたします。

日本スポーツ社会学会事務局
〒760-8521　香川県高松市幸町 1-1 香川大学教育学部
事務局長・会計担当　小椋　博

庶務担当　野崎武司

（学会費納入の郵便振込の連絡欄に、住所変更などを書き添えられる方が多いのですが、事務局へは画質の悪い伝票が届きますので、文字を判読できない場合があります。住所変更などの連絡は、お手数ですが、電子メイル・ファックス・郵便などの方法で事務局へお知らせ下さい）

◎会報への投稿に関しましては以下までお願いします。

〒700-8530　岡山市津島中 3-1-1　岡山大学教育学部
会報担当　松田恵示

◎学会ホームページ（http://sport.kyokyo-u.ac.jp/jsss/jssshp.htm）は、京都教育大学、杉本厚夫会員が管理・運営されてます。

◎なお、上記以外に、小谷寛二理事（呉大学）と依田充代会員（日本体育大学）が事務局とともに活動しています。



# 入会申し込み書

（※事務局へご返送願います）

| | |
|---|---|
| ふりがな<br><br>氏　名： | 会員種別（どちらかを○印で囲む）<br><br>正会員・学生会員 |
| 紹介者：<br><br>（推薦人）※必ず明記してください | 専攻分野・関心領域（キーワード2つまで） |
| 勤務（所属）先： | |
| 勤務（所属）先住所：〒<br><br>TEL（　　）　　FAX（　　） | |
| 連絡先住所：〒<br><br>TEL（　　）　　FAX（　　） | |
| E.mail： | |

井上　俊・亀山佳明編

## スポーツ文化を学ぶ人のために

文化として、様々な形で人々と深くかかわるスポーツ。その関係を読み解く視点をわかりやすく提示し、スポーツ文化研究の基礎を築く文献

二三〇〇円

日本スポーツ社会学会編

## 変容する現代社会とスポーツ

経済、文化のグローバリゼーションの中でスポーツの意味が再び問われ始めた。世界の研究者が京都会議で熱く語ったスポーツの行方とは――

二五〇〇円

井上　俊編

## 新版 現代文化を学ぶ人のために

映画、音楽、文学、ジャーナリズム、旅行、恋愛、ファッション、スポーツなど、多様な側面から時代のドラマを照らし出す「現代文化論」

二〇〇〇円

多田道太郎編

## 環境文化を学ぶ人のために

環境文化論の一つの基準を示す諸考察によって、身の回りのヒト・モノ・コトから現れる一人ひとりの「環境」へのアプローチ力を培う

一九〇〇円

和田　武編

## 環境問題を学ぶ人のために

温暖化・酸性雨・公害・環境ホルモンなど――山積する諸問題をわかりやすく整理し、環境教育等により持続可能な社会への転換を促す

二三〇〇円

伊藤公雄・牟田和恵編　1800円

### ジェンダーで学ぶ社会学

「生まれる」から「死ぬ」までの身近なできごとを問いなおし、そこにひそむ「性差」の圧力を浮き彫りにする、ユニークな社会学のテクスト

J・リーヴァー　亀山佳明・西山けい子訳　2233円

### サッカー狂の社会学

ブラジルの社会とスポーツ

W杯を四度制覇したブラジル・サッカーの強さの秘密を社会学の視点から考察した貴重な一冊

黄　順姫　2800円

### 日本のエリート高校

学校文化と同窓会の社会史

名門高校はいかにしてエリートを生み出してきたか。その身体文化の形成・変革・継承を捉える

杉本厚夫　1893円

### スポーツ文化の変容

多様化と画一化の文化秩序

現代社会における文化装置としてのスポーツが発信する様々なメッセージを多様な視点から読む

世界思想社　京都市左京区岩倉南桑原町56　☎075(721)6506
http://www.sekaishisosha.co.jp〈消費税別〉